

二〇二〇年一〇月九日

ななかまど深山の池を囲みけり  
何するでなくて一人の夜の長し  
亡き夫を偲ぶ深山の草紅葉  
句帳には花の名ばかり花野道  
秋晴や曲がらぬやうに畝作り  
結局は捨てる木の実を拾ひけり

二〇二〇年一〇月八日

揺れやまずカメラ泣かせや秋桜  
入日さす真珠筏や秋の海  
能舞台かかと打ち込む音さやか

二〇二〇年一〇月七日

電柱の写らぬ様に薄撮る  
真つ直ぐに港へ下る紅葉坂  
訳ありと売られし林檎切れば蜜  
秋耕の影のびにのび夕日落つ  
味噌焦げる香や新米の五平餅  
柚道のしるべとなりし烏瓜

二〇二〇年一〇月六日

秋の水一枚岩を滑るかに  
山霧に湯気混じりゆく有馬かな  
二の鳥居潜れば香る菊花展

素 秀

やよい

む べ

なつき

こすもす

たか子

たか子

もとこ

素 秀

明日香

智恵子

満 天

凡 士

なつき

む べ

ぼんこ

はやと

智恵子

二〇二〇年一〇月五日

出はひりす部屋に狹庭の萩の屑  
新蕎麦や句帳に栞る箸袋  
藁ぼつち残る青さの句ひけり  
宿坊の廁一輪菊明り  
カリヨンの優しく響く秋の空  
一刷毛の秋雲に乗り朝日出づ  
鳶職のニッカポッカや秋高し

二〇二〇年一〇月四日

風吹けば回り出しそう曼珠沙華  
鹿跳ねて角切り勢子の息弾む  
蟪蛄の寄らば切るぞと鎌翳す

二〇二〇年一〇月三日

観月の夕べや平家琵琶奏づ  
立待ちの月の在り処か雲明かり  
秋草や祈りの道をたもとほり  
お点前の指美しき良夜かな  
ひまはりの種採る子らの学校田

うつぎ

素 秀

なつき

智恵子

宏 虎

せいじ

たか子

満 天

宏 虎

たか子

小 袖

はく子

む べ

うつぎ

なつき

毎日句会みのる選・二〇二〇年一〇月二日